

資本主義的生産関係と生産力

——『資本論』第1巻第4篇の独創性——

頭 川 博

はしがき一問題の所在

マルクスは、生産力の発展にもとづく相対的剰余価値論しか存在しない古典派に対して、生産関係の敵対性による剰余労働の本源的生成を説いて絶対的剰余価値論を構築し『資本論』の核心をすえた。絶対的剰余価値論こそ、剰余価値論における古典派とマルクスとを分かち最大の相違点である。ところが、そうだとすれば、相対的剰余価値論に関して、古典派に対するマルクスの独自性如何という疑問に直面する。われわれのサーベイによれば、従来、古典派とマルクスとの間に伏在する相対的剰余価値論の原理的な差別性が分析されていない。というのも、古典派との相違点こそ『資本論』の独自のレゾン・デートルをなし、そこにマルクスの独創性があるからである。例えば、労働の二重性と剰余価値の秘密とが『資本論』におけるマルクスの二大発見であるのは、価値実体としての抽象的人間労働を労働生産物同士の交換の中でのみ成り立つ特殊歴史的な存在と認め、剰余労働をもって生産関係の敵対性を決め手として本源的に導きだし階級社会に固有な存在とみなす場合に限られる¹⁾。従って、生産力発展→商品価値低廉化→労働力の価値低下→必要労働の短縮→労働日不変のもとでの剰余労働の増大という因果関係で示される相対的剰余価値生産のメカニズムに関して古典派とマルクスとの間の相違認識は、『資本論』を読む際の至上命題である。ところが、『資本論』におけるマルクスの二大発見は古典派のとった抽象的人間労働と剰余労働の超歴史説の根本的な転換と等価であることが一般に未承認であるのと同様、相対的

剰余価値論に関して古典派をこえるマルクスの画期的功績が析出されていない。思うに、その原因は資本主義的生産関係によって剰余価値生産を特殊歴史的に導きだすマルクス特有な理論認識の不十分さにある。具体的にいえば、マルクスは、労働者からの生産条件の分離という生産関係の基底的な一面を決め手にして剰余労働の本源的生成を説く一方、社会的な生産条件の資本家による排他的所有という同じ生産関係の別の具体的な一面に着目して、それが剰余価値生産を増進する生産力発展の社会的基礎をなす特殊歴史的な関係を発見し、剰余価値生産の二つの方法に潜む独自の社会的規定性を解析したのである。従って、古典派とマルクスの剰余価値論を分かť分水嶺は、剰余価値生産を資本主義的生産関係によって内在的に規定するその特殊歴史的性の発見にある。古典派をこえた剰余価値論でのマルクスの独創性の認識は剰余価値生産に貫徹する特殊歴史的な生産関係の契機の発見に帰着する。

それゆえ、本稿の課題は、相対的剰余価値論に関して古典派をこえるマルクス固有の功績を分析して、『資本論』の独創性は資本主義的生産関係の独自性把握とペアである事実を突きとめることにある²⁾。

- 1) 拙稿「『資本論』の分析的方法の独自性」『経済』復刊第5号, 1996年 参照。
- 2) 本稿は、わたしの『資本論』第1巻研究で絶対的剰余価値論(「剰余価値の必然的発生根拠」『一橋論叢』第96巻第2号, 1986年)と資本蓄積論(「資本蓄積と貧困化法則」『高知論叢』第34号, 1989年)との間にあった空白域を埋める新たな試みである。

1 相対的剰余価値論と古典派

本稿の課題は古典派の相対的剰余価値論をこえるマルクスの独創性の析出にあるから、本節ではまず、マルクスの創案になる絶対的剰余価値論との対比でスミスとリカードに代表される古典派がもつたら相対的剰余価値論のみ念頭にあった事実を確認する。

古典派は労働日不変という絶対的前提のうえで必要労働の減少によって剰

余労働の増大を導きだす考え方をとったのに対して、マルクスは古典派の前提する剰余労働それ自体は如何にして生成するかという根源的な設問を提起した。というのも、剰余価値とは前貸しされた価値を上回る価値であるから、その実体をなす剰余労働は、生産条件を所有する労働者によっては支出されないからである。つまり、賃金労働者の前身である独立生産者の場合には、その労働力の発揮は生産条件を所有する労働者を丸ごと再生産するに足る付加価値を形成する一方、剰余価値を産出しない。「商品所持者は彼の労働によって価値を形成することはできるが、しかし、自分を増殖する価値を形成することはできない。」(Kapital, I, S. 180) 要するに、労働者が私的にか社会的にか生産条件(生産手段+生活手段)を所有する場合には、日々の消費財を生産する労働部分も蓄積財源を生産する労働部分も素材的には性格を異にするがともに生産条件を所有する労働者の再生産に必要な労働という点で、その一労働日全体が必要労働時間から成り立つとマルクスは考える。それでは、論理的にいて、独立生産者が賃労働者に転化する際如何にして剰余労働が発生するかといえば、まず第一に労働者は生産条件を資本家に奪われることによって、その必要労働が消耗した労働力を元通りに回復するだけの分量に圧縮される一方、労働力の価値と引き換えに取得されたその使用価値である労働力の一時的使用権を資本家が行使して労働日が必要労働をこえて延長されるという正反対の方向性をもつ二面的な運動によってである。従って、マルクスにあっては、労働生産性はそれが如何に高くても剰余労働の可能性を与えるにすぎず、その現実性は生産関係の敵対性により規定される。まさに、絶対的剰余価値論とは、労働者が生産条件を所有する基礎の上では存在しない剰余労働が生産関係の敵対性により初めて絶対的に発生するメカニズムの説明にほかならない。

このように、マルクスの絶対的剰余価値論にあっては、生産力不変の基礎上で生産関係の敵対性を扇の要にして労働日の延長によって剰余労働の存在を導きだす一方、古典派にあっては、逆に労働日不変の前提上で生産力の発展から剰余労働の増大を引きだす手法がとられる。古典派が剰余価値生産を

考察する際、常に労働日の大きさを不変と前提した事実についてはマルクスの終始強調する論点であった。「彼（リカード—頭川）は、剰余価値の源泉も絶対的剰余価値も探求せず、したがって労働日を一定の大きさとみなしている。」（*Mehrwert*, II, S. 411）「彼（リカード—頭川）は（スミスやその先行者の場合にも見られるように）、労働日の大きさは与えられているということから出発する¹⁾。」（*Ibid.*, S. 415, 圏点—マルクス）「労働日を一つの不変量として取り扱うアダム・スミス」（*Kapital*, I, S. 563）。古典派は、労働日一定を大前提にしたうえで、次に、分業や機械の改良などによる生活必需品の低廉化（＝必要労働の減少）から剰余価値の大きさが規定される因果を主張する。従って、古典派にあっては、労働日の長さが与件で剰余価値生産が生産力発展によって規定される限り、唯一相対的剰余価値論のみが存在する。「総労働日は、労働日のうちで賃金の生産に必要な部分よりも、大きいのである。なぜか？という問題はでてこない。したがって、総労働日の大きさがまちがって固定的なものとして前提され、…剰余価値の増減は、必需品を生産する社会的労働の生産性の増減からのみ説明することができるにすぎない。すなわち、ただ相対的剰余価値だけが理解されているのである。」（*Mehrwert*, II, S. 408, 圏点—マルクス）古典派には相対的剰余価値論しかないと断定する際の問題の一つは、スミスによる剰余労働の発生の説明にある。というのも、スミスは、stockの蓄積→分業の一層の発展→利潤の生成というそのシェーマが示す通り²⁾、事実上剰余労働の発生を生産力増進によって説明したが、これはリカードに代表される相対的剰余価値生産の説明と全く同じでないからである。しかし、スミスとリカードの説明原理は、労働日と労働者の消費する必需品分量との一定の想定の下に生産力の発展をもちこみ剰余労働を事実上一労働日と必需品生産に要する労働量との差額として把握する本質的な関係の点では同一であり、両者の相違は生産力発展によって剰余労働の発生を説くかその増大を説くかの副次的な点にしかない。従って、古典派の説明は、スミスのそれを含めて、剰余労働を生産関係の面からではなく労働日一定の前提上での生産力発展により規定する点で相対的剰

余価値論に属する。いうまでもなく、スミスやリカードの相対的剰余価値論は重商主義に比して剰余価値形成それ自身を認める点で優位性をもつ。「重商主義においては、剰余価値は相対的であるにすぎない。一方が得るものを他方が失うのである。…一国の内部では、総資本を考えるなら、事実上、剰余価値の形成は少しも生じない。」(*Mehrwert*, I, S. 37) だから、スミスやリカードの剰余価値論は相対的にしか剰余価値形成を認めない重商主義と区別される半面、剰余価値形成をもっぱら生産力増進から説明する点でマルクスの絶対的剰余価値論と一線を画する。その意味で、古典派の剰余価値論は、重農主義を本質的にこえていない。なぜなら、前者では、剰余価値は農業労働の生産性の賜物とみなす後者に対して、剰余価値を形成する労働が物質的財貨をつくる労働一般に拡大されるという進歩はあるが、両者の相違は価値形成労働の一般化に起因するにすぎず、剰余労働は生産力に規定されるという基本線において、両者に違いはないからである³⁾。だから、剰余価値学説の歴史は、大きく重商主義→重農主義を含む古典派→マルクスによって構成される。

以上、われわれは、本節で、マルクスは、生産力不変の前提上で生産関係の敵対性に注目して、圧縮された必要労働をこえる労働日の延長によって剰余労働の本源的生成を説き絶対的剰余価値論を創造したのとは正反対に、古典派は、生産関係の敵対性を閑却して、労働日不変の前提上で生産力発展だけに着目し剰余労働の増減を問題にしたがゆえに相対的剰余価値論しかもたない所以を説いた。

- 1) 賃金と剰余価値とに分割される価値生産物の大きさの不変性に関するリカードの主張(『経済学および課税の原理』雄松堂書店、堀経夫訳、463—4 ページ)は、労働時間の不変性の主張に帰着する(*Mehrwert*, II, S. 418, *Kapital*, III, S. 251)。
- 2) 『諸国民の富』I, 岩波書店、大内・松川共訳、131—2 ページ。
- 3) 古典派が剰余労働を生産力の発展から理解した限り、「重農学派は剰余価値の秘密を見抜かなかった」(*Kapital*, I, S. 556) という評価はそのまま古典派に妥当する。

2 古典派と生産関係

われわれは、前節で、剰余労働の発生を生産関係の敵対性によって説くマルクスの絶対的剰余価値論との対比で、生産力発展に着目して剰余価値生産を論じる古典派には相対的剰余価値論しかない事実を考察したが、その事實は、相対的剰余価値論における古典派とマルクスとの同一性を意味しない、というのも、古典派にあっては資本主義は生産の絶対的な形態とみなされ、相対的剰余価値生産をもたらす生産力増進の社会的な基礎の歴史的理解がないからである。因みに、資本主義における生産力発展の社会的基礎は賃労働者の対極での資本家による社会的生産条件の排他的な所有にあるから、相対的剰余価値生産をもたらす生産力発展の古典派による非歴史的把握は結局資本主義的な生産関係の無理解に起因する。そこで、本節では、シェーマとしてはマルクスと同じ相対的剰余価値生産のメカニズムを説く古典派には、生産力発展の社会的基礎をなす生産関係の特殊歴史性把握に欠陥がある事実を究明する。

スミスが生産力発展の最大の要因を分業に求めたことは著名であるが、その分業論で最大限注意すべきはその分業が工場内分業としてよりもむしろ主要には社会的分業として理解される点にある。というのも、スミスは、生産力改善の基本要因たる分業を商品交換という人間の本性の必然的な帰結だと確言しているからである¹⁾。つまり、スミスが分業の具体例としてピン製造業者の作業場を挙げたのは説明上の便宜にすぎない。スミスにあっては、資本主義における高度な生産力発展は商品交換によって社会全体の個別的労働が結び合わされ統一的な分業を形成している事実によって一義的に説明される²⁾。作業場内分業は、生産力発展の主要な要因たる社会的分業に対して個別的労働が一つの全体的労働に結合される副次的なミニチュアである。逆にいえば、社会的分業と工場内分業とは、個別的労働を共同的労働にまとめあげる分業という形態的な面では全く同じとみなされる。スミスにあっては、労働生産物と商品との区別の不明確さから、商品交換によって媒介される社

会的分業と単独の生産過程で成り立つ工場内分業とは区別がなくなり、後者は前者に対して労働士の結合が生産内部で成り立ち生産条件の集積を必要とする点でより高次の生産関係を内蔵するという認識に欠ける。だから、マルクスは、次のように、社会的分業と工場内分業との同一視を批判するのである。「A・スミスは二つの意味の分業を区別しない。」(MEGA, II/3・1, S. 243, 圏点—マルクス)「スミスはじっさい、分業を社会内部の分業とごっちゃにしている。」(Ibid., S. 246)ところが、商品交換によって媒介される社会的分業と社会全体の生産条件の排他的な所有を前提する点で資本主義に独自の工場内分業との概念的な同一視は、独立生産者による単純な商品生産と資本主義的生産の混同等価である。「アダム・スミスは、商品生産一般を資本主義的生産と同一視している。」(Kapital, II, S. 387)「スミスは資本主義的生産をやはりまだあちこちで直接的生産者のための生産と混同しているのである³⁾。」(Resultate, MEGA, II/4・1, S. 118)単純な商品生産と資本主義的生産との無区別は、資本主義的生産関係の特殊性把握の欠如に帰着するから、社会的分業と工場内分業との差別性無視は、資本主義的生産関係のはらむ敵対性の無理解と同じである。スミスの場合、資本主義における工場内分業の特殊歴史性の閑却は、その独自の生産関係の生半可な理解に帰着する。

これに対して、古典派の完成者たるリカードの場合は、単純な商品生産と資本主義的生産との相違を曖昧にしたスミスよりも一層徹底している。というのも、リカードには両者の認識そのものがなく、唯一の生産形態としての資本主義が生産の永遠の自然的形態とみなされたからである。「彼にとっては、資本主義的生産様式は社会的生産の自然的かつ絶対的な形態である。」(『資本の流通過程』, 大月書店, 中峯・大谷他訳, 290ページ)資本主義が唯一の絶対的生産様式とみなされれば、その生産関係もまた与件として絶対化される⁴⁾。その結果、リカードにとっては、資本主義的生産関係は「自然的な永遠の法則」(MEGA, II/3・1, S. 141)をなし、剰余労働を生み出す資本関係は「自然的関係」(Ibid., S. 228)とみなされる。従って、資本主義を唯一の自然的な生産形態とみなすリカードにあっては、生産力発展の社会的

基礎を生産関係の特殊性との関連で歴史的に理解する道は最初から封殺される。工場内分業を「永久的な一法則」(*Misère de la philosophie, Werke*, Bd. 4, S. 144)・「単純で抽象的な一カテゴリー」(*Ibid.*)と理解したブルードンと同様、「大工業の経済学者」(『資本の流過程』, 290 ページ, 圏点—マルクス)と称されるリカードには、生産力発展の最強の手段と考える機械が稼働する「近代的工場」(*Misère*, S. 149)を「一つの社会的生産関係」(*Ibid.*)とみなす認識は存在しない。

以上、われわれは、本節で、古典派は、剰余価値生産を増進させる生産力発展の社会的基礎をもって生産関係の敵対性との関連で特殊歴史的に把握しない事実を考察した。

- 1) 『諸国民の富』I, 81 ページ。
- 2) 「スミスは分業の基礎を労働生産物の交換に求め」(内田義彦『増補経済学の生誕』未来社, 1962年, 236 ページ)るとともに、「生産力の基礎を、何よりも商品生産者間の分業にもとめた」(同上, 231 ページ)。
- 3) これについては、なお、*MEGA*, II/3・1, S. 246, 『諸国民の富』I, 84 ページを見よ。「経済学は二つの非常に違う種類の私有を原理的に混同している」(*Kapital*, I, S. 792)という指摘は、スミスに典型的にあてはまる。
- 4) *MEGA*, II/3・1, S. 228。

3 生産関係と労働過程の社会的結合

われわれは、前節で、相対的剰余価値生産に結実する生産力発展の社会的基礎を資本主義的生産関係との関連で特殊歴史的に規定しない古典派の欠陥を解剖した。いうまでもなく、生産力発展の最深の基礎に資本主義的生産関係を見だし相対的剰余価値生産の秘めた独自の社会的規定性を析出したのはマルクスである。マルクスは、まず剰余労働の本源的生成を直接的には生産関係の敵対性によって説き絶対的剰余価値論を新しく樹立する一方、その同じ生産関係の敵対性に剰余価値生産の増進をもたらす生産力発展の社会的基礎を求めて相対的剰余価値生産固有の特殊歴史性を確認し、全体として古

典派と明確な一線を画する独創的な剰余価値論を完成した。そこで、本節では、資本主義における生産力発展の社会的な基礎を生産関係の敵対性にもとめ、剰余価値生産増進の内面に潜む特殊歴史性をえぐりだしたマルクスの相対的剰余価値論の古典派に対する独自性を析出する。

第1節で述べた通り、剰余労働の生成それ自身は本源的蓄積にもとづく生産条件の労働者からの分離により本質的に規定される。ところが、資本主義的生産関係が剰余労働の生成を規定するという場合最大限注意すべきは、その生産関係がもつ最も中心的な契機である労働者からの生産条件の分離という一面のみへの着目という事実にある。つまり、ここで、労働者が必要労働をこえる労働日の延長を強制され剰余労働を本源的に支出するという場合、資本家の排他的所有になる社会的な生産条件に対応した多数の労働力の結びつきは問題の射程外にある。因みに、マルクスは、『資本論』第1巻第5章で絶対的剰余価値論の核心を説く際「労働者を他の労働者との関係のなかで示す必要はな」(*Kapital*, I, S. 198)く、「一方の側にある人間とその労働、他方にある自然とその素材、それだけで十分だ」(*Ibid.*, S. 198 f.)と前置きしているが、ここで、労働過程のもつどんな社会的形態にも無関係な抽象的契機の考察という目的に隠された含意を読みとるべきである。まさに、マルクスは、労働者からの生産条件の分離というきわめて抽象的な次元上で、必要労働をこえる剰余労働の本源的生成の秘密を説き絶対的剰余価値生産の本質規定を与えたのである。その意味では、資本主義的生産関係の軸心は、生産条件の労働者からの分離そのものにある。マルクスが「資本 {すなわち生産条件の労働者からの分離}」(*Mehrwert*, III, S. 414, 圏点—マルクス)とか「一方の労働条件と他方の生産者との分離こそは、資本の概念を形成する」(*Kapital*, III, S. 256)とかいうのは、資本の本質たる資本主義的生産関係の要が生産条件の労働者からの分離そのものにある事実に起因する。

ところで、剰余労働の生成を規定する資本関係の軸心は、確かに「資本の独自の本性」(*MEGA*, II/3・1, S. 85)としての生産条件の労働者からの分離にあるが、生産条件の労働者からの分離それ自体は、資本主義的生産関係

の基底的一面にとどまる。資本主義的生産関係のもう一つ別の具体的一面は、少数の資本家のもとへの社会全体の生産条件の集積という契機にある。資本主義の創世記をなす本源的蓄積とは、生産条件を個別的に所有する圧倒的多数の直接的生産者が収奪されその社会全体の生産条件が少数の資本家によって排他的に所有されることである。「相対的にわずかな人々の手中への生産手段の集積は、そもそも資本主義的生産の条件および前提である。」(Ibid., S. 327, 圈点—マルクス)「個人的で分散的な生産手段の社会的に集積された生産手段への転化」(Capital, I, S. 789). 従って、資本主義的生産関係は、資本家と労働者との間の生産条件の所有をめぐる敵対関係という本質的一面と同時に、膨大な生産者から分離された社会全体の生産条件の少数の資本家のもとへの集積というより具体的一面とをあわせもつ。剰余労働の本源的生成メカニズムを解く際、その生成が生産条件の敵対的な所有関係それ自体により根本的に規定されるがゆえに資本主義的生産関係のもつ基底的一面のみに着目され、資本家のもとへの社会全体の生産条件の集積というもう一つ別個の具体的一面は捨象された。従って、資本主義的生産関係のもつ本質的一面である生産条件の敵対的な所有関係に極力注目して剰余労働の本源的生成を説いたあかつきには、次に、これまで捨象してきた資本家のもとへの社会的な生産条件の集積という生産関係のもう一つ別の具体的一面を復活させ、それが剰余価値生産に与える作用を分析すべきことになる¹⁾。それだから、第1巻第3篇に続く第4篇の課題は、それまでに捨象されてきた資本主義的生産関係のもう一つ別の具体的一面である少数の資本家のもとへの社会的な生産条件の集積による剰余価値生産に対する影響の考察にある。

ところで、資本家のもとへの社会全体の生産条件の集積は、それ自体としては、単に労働力が生産的に発揮されるために必要な物質的な条件にとどまる。生産力とは、労働の唯一の超歴史的な姿態たる具体的有用労働の単位時間における作用程度であるから、資本主義での生産力発展は、直接的には、資本家のもとでの社会的な生産条件の集積を根本前提に成り立つ「労働過程の社会的結合」(Ibid., S. 511)に立脚する。つまり、独立生産者からなる単

純商品生産の賃労働者が担う資本主義的生産への転化とは、孤立的な労働が行なわれる「個別的労働過程」(*Ibid.*, S. 350)から集団的な労働が行なわれる「社会的労働過程」(*Ibid.*)への発展転化にはかならない。「矮小規模の分散的な労働過程から大きな社会的規模の結合された労働過程への転化」(*Ibid.*, S. 525 f.). 社会的労働過程では、多数の労働力が結合される結果、個々の労働が互いに直接補い合う社会化された共同的労働＝大規模な労働の成立により、具体的有用労働の作用程度が高まり、個別的労働の算術的合計を上回る社会的労働の生産力が成り立つ。加えて、個別的労働の社会的結合により、生産手段の共同利用が可能となって不変資本部分の節約が生じ、商品価値の低廉化が一層進む。「生産手段の充用における節約は、ただ、それを多くの人々が労働過程で共同で消費することだけから生ずるものである。」(*Kapital*, I, S. 344)「不変資本の節約—資本主義的生産様式のなかで労働が受け取るその社会的形態によってはじめて可能になる。」(*MEGA*, II/3・6, S. 2015, 圏点—マルクス)従って、総じていえば、社会的労働過程では、共同的労働の成立が個別的労働過程での孤立的労働に比して生産力を飛躍的に上昇させる。労働生産性増進という「積極的な成果」(*Ibid.*, II/3・6, S. 2144, 圏点—マルクス)は、「労働の社会的形態によって達成される」(*Ibid.*)。「個々人の生産力が、労働の社会的形態によって増大する²⁾。」(*Ibid.*, II/3・1, S. 232)

それゆえ、マルクスにあっては、相対的剰余価値生産につながる生産力発展は、資本家による社会全体の生産条件の排他的な所有という資本主義的生産関係に裏づけられて成り立つ。従って、マルクスは、生産条件の排他的所有という敵対的生産関係の基底的一面により剰余労働の本源的生成を説明する一方、資本家のもとでの社会全体の生産条件の集積という同じ生産関係のもう一つ別個の具体的一面に着目して剰余労働の増大を説き、もって剰余価値生産の二つの方法に貫徹するその特殊歴史性を析出したのである。だから、古典派に対するマルクスの相対的剰余価値論の優位性は、マルクスが古典派とは違って、剰余価値生産の増進をもたらす生産力発展の社会的根拠を生産

関係の敵対性に求め、その生産方法の内蔵する特殊歴史性を析出した点にある。マルクスは、「資本主義的生産は、とりわけ作業場内部での分業をもたらす」(Ibid., S. 289)という事実認識から、その「分業」(Ibid., S. 273)は「多種多様な社会状態に共通する一般のカテゴリー」(Ibid., S. 274)ではなく「まったく規定された歴史的な・資本の一定の歴史的発展段階に対応する・生産様式」(Ibid.)だという立場で、「A・スミスは分業を、特殊な・独自の区別がある・資本主義的生産様式に特徴的な・形態としてとらえていない」(Ibid., S. 244, 圏点—マルクス)と批判しているが、工場内分業が「資本主義的生産に特有なもの」(Ibid., S. 243)である所以は、その工場内分業が生産関係の敵対性に裏打ちされた社会的に結合された労働過程たる点にある。「A・スミスは分業については一つも新しい命題を立ててはいない」(Kapital, I, S. 369)というマルクスの評価は、スミスが特有な歴史性の刻印された工場内分業と超歴史的に存在する社会的分業とを同一視し、両者のうちに使用価値に表現される労働の多様性を見るにすぎないからである。だからこそ、マルクスは、スミスの分業論をまだ「古代的な立場」(MEGA, II/3・1, S. 246, 圏点—マルクス)だと規定し、それとの違いは生産力発展による剰余価値生産増進という「分業の結果および目的の考察においてのみ」(Ibid.)だと明言するのである。概して、古典派には、工場内分業は、労働過程の独自の編成方法として、封建制までは未発展で資本主義で初めて恒常的な形態になったという事実認識が存在しない³⁾。資本主義以前でも大規模な建造物の建設などの際には協業や分業は存在したが、資本主義では労働過程での労働者の結合は、生産関係の敵対性に裏づけられ独自の社会的規定性をもつ生産の基本方法になる点で、以前の生産形態と本質的に相異なる。マルクスは、まず生産力発展をもたらす「労働過程の社会的な結合」(Kapital, I, S. 528)または「生産過程での労働力の社会的結合」(Ibid., II, S. 356)が資本主義に特有な生産様式だという事実認識に立脚したうえで、更に、工場内分業＝社会的に結合された労働過程の大前提には生産関係の敵対性がある脈絡を分析し、生産力発展をもたらす剰余価値生産増進の基礎にそ

の生産方法固有の特殊歴史性を確認したのである⁴⁾(資本関係→共同的な労働過程の成立→社会的労働の生産力)。相対的剰余価値生産には、結合された労働過程=社会的労働を媒介項にして資本主義的生産関係が生産力発展を規定するという隠された因果関係がある。「資本関係には、また、特定の生産様式と生産諸力の発展とが照応しなければならない。」(MEGA, II/3・1, S. 121)「生産関係によって条件づけられているかぎりでの、生産諸力の発展」(Ibid., S. 129)。因みに、生産関係による生産力の規定関係の存在によって、依存し合いつつ排除し合う両者の矛盾概念が成り立つ⁵⁾。

通例、労働過程といえば、すぐにあらゆる社会形態に共通な生産活動の超歴史的な条件としてのみ観念される傾向があるが、人間と自然との間の物質代謝の条件という限定でのみ、労働過程は、すべての生産形態に普遍的な人間活動であるにすぎない。つまり、労働過程は、人間と自然との間の物質代謝としては確かにあらゆる生産形態に妥当する超歴史的な規定をもつ半面⁶⁾、大規模な共同的労働を可能にする労働力の結合された工場形態としては少数者により排他的に所有された社会的な生産条件の集積を根拠とする特殊歴史性をもつ。ここでは、マルクスが『資本論』第I巻第5章第1節で「労働過程はまず第一にどんな特定の社会的形態にもかかわりなく考察されなければならない」(Kapital, I, S. 192)というその深遠な含意を読みとる必要がある。というのも、労働過程は、ある歴史的な生産形態のなかではそれ固有な「特定の社会的形態」をもつからこそ、最初その歴史的形態を離れた分析の必要性があるからである⁷⁾。因みに、別の個所には「労働過程の…歴史的に規定された社会的形態」(Ibid., III, S. 832)という明示的な規定がある⁸⁾。そもそも「労働過程そのものの協業的な性格」(Ibid., I, S. 531)や「労働過程の協業的形態」(Ibid., S. 790)とか「単純協業は、その発展した諸形態と同様に、労働過程に属する」(MEGA, II/3・1, S. 233)というように、生産力発展を規定する協業や分業などは、「労働過程そのものの仕方様式」(Ibid., S. 121)にほかならない。従って、協業や分業は、「物質的生産の変化した姿態」(Ibid., II/3・6, S. 2142)または「労働過程の…社会的発展形

態」(*Kapital*, III, S. 891)として資本主義の独自の労働様式であるがゆえに、労働過程は、超歴史性と同時に生産関係の敵対性に規定された歴史的な形態をあわせもつのである。ついでにいえば、「大規模生産が資本主義の形態ではじめて発展する」(*Ibid.*, S. 96)とマルクスがいうように、資本主義に特有な「大規模な社会的生産」(*MEGA*, II/3・1, S. 299)は、資本家による社会的な生産条件の排他的所有という生産関係のもう一つ別の具体的な一面と概念的な対応関係にある。

以上、われわれは、本節で、剰余価値生産を増進させる生産力発展の物質的基礎には生産関係の敵対性に裏づけをもつ社会的に結合された労働過程がある事実を析出して、古典派に対するマルクスの相対的剰余価値論の独創性は、生産関係の敵対性が生産力発展を規定する特殊歴史的な関連を発見した点にあることを考察した。

- 1) 「労働の生産性は、対象化された労働が生産過程にはいる規模が増大し、拡大することによって発展する…それと同時に剰余価値が増大する。」(*MEGA*, II/3・6, S. 2228, 圏点—マルクス)
- 2) 「社会的労働の生産力」(*Kapital*, I, S. 349)という表現は、個別的労働がその結合によって直接に社会的労働としての性格をもつがゆえに発揮される生産力増進効果を端的に示す。まさに名は体を表わす。
- 3) 「工場のなかでの資本主義的分業」(*Resultate*, S. 28, 圏点—マルクス)という規定が示す通り、工場内分業が中世の同職組合にいたるまで一貫して未発達であった事実については、*Kapital*, I, S. 379f., *Die deutsche Ideologie, Werke*, Bd. 3, S. 25, *Misère, Ibid.*, Bd. 4, S. 151, *Manifest, Ibid.*, Bd. 4, S. 463, S. 469, *Von der Utopie zur Wissenschaft, Ibid.*, Bd. 19, S. 227 を見よ。
- 4) 次の発言は示唆的である。「スミスが分業をもつて社会の富の増加の原因にすぎぬとした考え方は、資本をもつて単なる生産要素にすぎぬという考え方と相通ずる」(高畠素之『マルクス経済学解説』古明地書店、1949年、97—8ページ)。
 なお、「分業の原理をも包括するところのいっそう根本的な原理」(『経済学原理』(1) 末永茂喜訳、岩波文庫、226ページ)としての「協業」(同ページ)というJ・S・ミルの指摘も古典派とマルクスとの間の断層を止揚しない。問題の焦点は労働過程の特定の様式と生産関係との結びつきにある。

- 5) 見田石介「論理的矛盾と現実の矛盾」『見田石介著作集』第1巻, 大月書店, 1976年, 92ページ参照.
- 6) マルクスは, 人間と自然との間の物質代謝としての労働過程の超歴史的な一面を「労働過程の抽象的な形態」(*Mehrwert*, III, S. 481)・「労働過程の一般の形態」(*MEGA*, II/3・1, S. 57)・「労働過程一般」(*Ibid.*, S. 82, 圏点—マルクス)・「その歴史的な規定性を捨象した労働過程」(*Ibid.*, S. 83)とか「単純な労働過程」(*Kapital*, III, S. 890)と呼んでいる. なお, 最後の「単純な労働過程」は「社会的生産過程」(*Ibid.*)と対応している.
- 7) 『資本論』第I巻第5篇14章冒頭では, 「労働過程は, まず第一に, その歴史的諸形態にはかかわりなく…抽象的に考察された」(*Ibid.*, I, S. 531)と回顧される.
- 8) 「労働過程の…歴史的形態」(*Resultate*, S. 57), 「社会的形態にある労働過程」(*Ibid.*).

4 資本による労働の形式的包摂と実質的包摂

われわれは, 前節で, 古典派の相対的剰余価値論に対するマルクスの独自性は, 生産力発展の社会的基礎を資本主義的生産関係に求めるか否かにあることを考察した. ところが, 生産関係の敵対性に裏づけをもつ生産力発展の基礎としての社会的に結合された労働過程は, それ自体, 資本による労働の実質的包摂=独自に資本主義的な生産様式をなし, その形式的包摂との概念的区別を形成する. そこで, 本節では, 『資本論』第I巻第5篇で規定された資本による労働の形式的包摂に対するその実質的包摂のもつ独自の差別性を解明する. マルクスは, 一方で次のようにいう. 「絶対的剰余価値の生産が, 資本のもとへの労働の形態的包摂の物質的表現と見られることができるように, 相対的剰余価値の生産は, 資本のもとへの労働の実質的包摂の物質的表現と見られることができる。」(*Ibid.*, S. 96) 他方で, 「相対的剰余価値の生産は, 一つの独自の資本主義的な生産様式を前提する」(*Kapital*, I, S. 533)といい, 「資本のもとへの労働の実質的包摂または独自に資本主義的な生産様式」(*Resultate*, S. 95)と規定する. 従って, 絶対的剰余価値生産=「資本のもとへの労働の形態的包摂」, 相対的剰余価値生産=「資本のもとへ

の労働の実質的包摂」＝「独自に資本主義的な生産様式」であるから、「資本のもとへの労働の形態的包摂」に対する「資本のもとへの労働の実質的包摂」のもつ差別性を明確にするには、「資本のもとへの労働の実質的包摂」と同義語としての「独自に資本主義的な生産様式」がヒントになる。それでは、「独自に資本主義的な生産様式」とは何か。それは、端的に言えば、資本家による社会的な生産条件の排他的な所有という資本主義的生産関係に規定された独特な生産方法としての社会的な労働過程を指す。換言すれば、生産関係の敵対性に裏づけをもつ社会的に結合された労働過程は、「資本関係に適合的な姿態」(MEGA, II/3・6, S. 2142)をなすがゆえに「独自に資本主義的な生産様式」を形成する。従って、われわれの結論は、以下のようになる。「資本が労働過程をその歴史的に伝来した姿または現にある姿のままに取り入れてただその継続時間を延長する」(Kapital, I, S. 334)といい、「労働日の単純な延長による剰余価値の生産は、生産様式そのもののどんな変化にもかかわらず現われた」(Ibid., S. 328)というように、絶対的剰余価値生産は、既存の生産方法の前提のうえでの生産関係の敵対性の必然的帰結として労働日が必要労働以上に延長されて成り立つ。ここでは、剰余労働が生みだされる労働過程は、敵対的な生産関係成立の前と後とでは同一で剰余労働の存否の点でのみ相異なるがゆえに、資本は労働過程を剰余労働形成の面でのみ形式的に包摂するにすぎない。他方、相対的剰余価値生産の場合には、資本家による社会全体の生産条件の排他的所有に規定されて集団的労働が成り立ち、労働の特有な社会的形態により生産力の発展がもたらされる。従って、この場合には、絶対的剰余価値生産とは違って、労働過程は、生産関係の敵対性に規定されて、生産力発展につながる労働の独特な社会的形態をうみだすその結合様式として資本概念に照応して編成替えされる。その意味で、資本は、労働過程そのものを社会全体の生産条件の排他的所有というその基本性格に合わせて編成替えして生産力発展の物質的基礎を初めて確立するがゆえに、労働過程を実質的に包摂することになる。従って、ここで、資本によって包摂される労働とは、生産力発展をもたらし労働の特有な社会

的形態を規定する労働過程と等価をなし¹⁾、形式的か実質的かという資本による包摂方法の相違は、労働過程が社会全体の生産条件の排他的な所有という生産関係の敵対性に対応して編成替えされ労働の独得な社会的形態を獲得するか否かにある。また、一步突っこんでいえば、「資本主義的生産様式の歴史的任務」(*Ibid.*, III, S. 457)としての生産力発展の基本方法は、加速的な資本蓄積による生産規模の拡大にあるが、もともと、資本主義という前提上での生産力発展のための生産規模拡大の原型は、その生産規模拡大による生産力発展が労働の固有の社会的形態により成り立つ限り、すでに、本源的蓄積によって形成され資本による労働の実質的包摂と同義語としての独自に資本主義的な生産様式のなかに存在する²⁾。その意味では、確立した資本主義の基礎上的生産力発展のための生産規模拡大は、その歴史的始点で形成される独自に資本主義的な生産様式(=資本による労働の実質的包摂)の量的な拡大である。両者の相違は、労働の独特な社会的形態の成り立つ独自に資本主義的な生産様式が資本蓄積によるかあるいはまた生産者からの生産条件の分離によるかにある。

それゆえ、資本による労働の実質的包摂とは、労働過程がその超歴史的な基礎に加えて、生産関係の敵対性に規定され社会的に結合された特殊歴史的な労働形態を追加的に獲得する事実³⁾に等しい。反対に、資本による労働の形式的包摂とは、既存の労働様式が継承され共同的労働という労働の特有な社会的形態を内蔵しない点で特殊歴史性を表現しない生産方法である。いうまでもなく、資本による労働の形式的包摂は、それが大規模な結合労働という労働の独得な社会的形態をもたない点でのみ、特殊歴史性を表現しない生産方法にすぎない。なぜなら、そこでは、既存の労働様式の基礎上で生産条件の労働者からの分離という生産関係の基底的一面によって、労働過程は同時に価値増殖過程という面をあわせもつからである。価値増殖過程自体が労働過程そのものの特定の社会的な一面である。価値増殖過程=「一定の社会的形態における労働過程—あるいは労働過程の一定の社会的形態—」(*MEGA*, II/3・1, S. 124)あるいは「労働過程によって生産される剰余価値

は…」(*Resultate*, S. 92) というのも、「労働過程が同時に価値増殖過程であ」(*MEGA*, II/3・1, S. 136) の事実の確固たる典拠である。

以上、われわれは、本節で、資本による労働の実質的包摂とは、その形式的包摂と違って、資本が生産条件の排他的所有に対応して社会的に結合された労働過程という特殊歴史性を追加的に獲得する事実と等価であることを考察した。

- 1) 「資本のもとへの労働過程の形態的包摂」(*MEGA*, II/3・1, S. 84, 圏点—マルクス). 同一趣旨の記述は, *Ibid.*, S. 57, S. 121, S. 165, S. 285, *Resultate*, S. 92 にもある。また、マルクスは、次のようにもいう。資本による労働の実質的包摂の際「ここで変化するのは、形態の関係だけではなくて、労働過程そのものである。」(*Ibid.*, II/3・6, S. 2142) 従って、ここでは、生産力発展を規定する協業や分業などは、労働過程自体の特殊歴史的な形態である事実が回帰的に証明される。「労働過程における変化」(*Kapital*, I, S. 333)・「労働過程そのもの」(*Ibid.*)の「革命」(*Ibid.*)と「労働の生産力の上昇」(*Ibid.*)とは等価である。
- 2) 「社会的労働の生産力が最も強力に発展させられる形態は、資本の形態である」(*Mehrwert*, III, S. 414) という場合、「資本の形態」は本源的蓄積によって生成する事実に留意すべきである。
- 3) われわれの主張は、資本による労働の実質的包摂が生産関係の敵対性に社会的基礎をもつ労働過程の変化を意味すると考える点で、労働様式の変革に果たす資本家の機能を重視する平子友長氏の意見(『社会主義と現代世界』青木書店, 1991年, 68—9ページ)と相異なる。但し、本稿の内容とは違いますが、生産関係が生産力を規定するという一面の指摘(同上, 63—4ページ)は啓発的である。

5 相対的剰余価値生産と資本そのものの生産

われわれは、前節で、資本による労働の実質的包摂は、その形式的包摂と違って、労働過程が生産関係の敵対性に規定され社会的に結合された特殊歴史性を追加的に取得する事実と等価であることを分析した。

翻っていえば、これまでの考察によって、独自に資本主義的な生産様式を前提する相対的剰余価値生産のなかで「資本自身の生成」が示されるという

特異な規定のもつ含意が明らかになる。そこで、本節では、前節での分析を踏み台にして、相対的剰余価値生産のなかでの「資本自身の生成」の含意を究明する。マルクスは次のようにいう。「資本が相対的剰余価値を創造するための…手段は、すべて労働の社会的形態であるが、それらが反対に、資本の社会的形態として現われる…その結果、資本がどのように生産するか、ということばかりでなく、資本そのものがどのようにして生産されるか、ということ—資本自身の生成—が示される¹⁾。」(MEGA, II/3・1, S. 285) 周知のように、『資本論』第I巻で「どのようにして資本が生産するかということだけではなく、どのようにして資本そのものが生産されるか」(Kapital, I, S. 189) という場合、「どのようにして資本が生産するか」は資本による剰余価値生産の秘密をなし、「どのように資本そのものが生産されるか」は剰余価値の資本への再転化による資本蓄積の問題に属する。従って、前者の問題は剰余価値論をなし、後者の問題は資本蓄積論を構成する。とりわけ、「どのように資本そのものが生産されるか」が資本蓄積論を指すのは、「どのようにして資本が剰余価値から生ずるか」(Ibid., S. 605) という同種の設問が第I巻第22章の課題だとされ、同じくそれが第24章の冒頭で「どのようにして…剰余価値からより多くの資本がつくられるか」(Ibid., S. 741) と換言される事実によって裏づけられる。ところが、先の引用文では、「資本そのものがどのようにして生産されるか」は相対的剰余価値論の問題だと明言されている。そこで、「資本そのものがどのようにして生産されるか」という問題はなにゆえ相対的剰余価値論に属するのかという疑問が生まれるが、これは以下のように考えれば解決する。即ち、すでに考察したように、資本は、結合された労働過程を形成して、生産力を以前に比して急速に発展させる共同的労働という労働の独得な社会的形態をつくる限りでのみ、社会全体の生産条件の排他的な所有という特定の生産関係に照応した特殊歴史的な生産方法を取得したことになる。つまり、生産力発展を特殊歴史的に規定する独自に資本主義的な生産様式の形成によって初めて、資本は、特定の生産関係という自己の本質に照応した労働過程の姿態をもつ。従って、資本は、相

対的剰余価値生産の次元上で初めて、特定の生産関係に歴史的に照応した労働過程の姿態によって剰余価値を形成する。その意味で、「資本自身の生成」とは、剰余価値が生まれる母胎としての資本に概念的に照応した固有な生産方法の成立を指す。これが、「資本そのものがどのようにして生産されるか」は相対的剰余価値論の問題だと規定するマルクスの真意にはかならない。だから、「資本そのものがどのようにして生産されるか」という同じ文言でも、その意味内容如何によりそれが課題とする該当箇所はおのずから相異なる。

1) 同種の規定は、*Mehrwert*, I, S. 365, *Resultate*, S. 129 にもある。

むすび

われわれは、本稿で、『資本論』第I巻第4篇を対象にして、相対的剰余価値生産に結果する生産力発展は、社会的な生産条件の資本家による排他的な所有という敵対的生産関係に規定されて、労働過程が共同的労働という労働の独特な社会的形態を新しく獲得することから生まれる因果関係を説き、相対的剰余価値論におけるマルクスの独創性は、生産力発展の社会的基礎を特殊歴史的な生産関係に求めたところにある事実を明確にした。

従って、マルクスの創造的な功績は、『資本論』第I巻第3篇で、資本主義的生産関係が剰余労働の生成を規定する特殊歴史的な秘密を解いた点にあるのに対して、第4篇では、同じ生産関係が生産力発展の社会的基礎をなし剰余労働を増大させるという特殊歴史的な関係を解いた点にある。その意味で、労働の二重性と剰余労働生成の秘密という『資本論』における二大発見の場合と同様、相対的剰余価値論の場合も、マルクス固有の歴史認識と古典派をこえる『資本論』の独創性とはペアである。これが本稿の結論である。

(高知大学教授)